

第 64 回関東都県算数・数学教育研究千葉大会記念講演

## 授業づくり5つの言葉～移行期を生かすために～

文部科学省初等中等教育局教育課程課

教科調査官

国立教育政策研究所教育課程研究センター教育開発部

教育課程調査官・学力調査官

永田 潤一郎

この記事は平成 21 年 11 月 17 日に OVTA で行われた第 64 回関東都県算数・数学教育研究千葉大会の記念講演をまとめたものです。永田潤一郎先生の教育現場に対する熱い思いの詰まった講演となりました。

### 1 はじめに

本日は第 64 回関東都県算数・数学教育研究千葉大会の開催，誠におめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。また，本大会の貴重な時間を頂戴してお話をさせていただきますことを大会事務局の先生方に感謝を申し上げます。また，日頃子どもたちの生きる力を育む教育にご尽力をいただいております先生方にこの場をお借りして御礼を申し上げます。本当にありがとうございます。さて，今日の話ですが，私が日頃「調査官として何を考えているのか」，「何を思い悩んでいるのか」という問題意識を皆さんと共有したいということで話をしていきます。

#### 算数・数学教育を考えるための 3 つのキーワード

私が調査官として何を考えているのか，これはおおよそ 3 つのキーワードで整理ができます。1 つ目は「学習指導要領」です。全面実施は小学校は平成 23 年度から，中学校は平成 24 年度から，高等学校は平成 25 年度からです。小中学校では現在先行実施されており，高等学校では平成 24 年度に 1 年生のみ先行実施ということで，今準備を進めているところです。皆さんにその内容をよりよく理解

していただくためにはどうすればいいのか？これは我々にとって 1 つの大きな課題になっております。2 つ目は「全国学力・学習状況調査」です。我々の立場からすると「よりよい問題をどのようにしてつくっていくのか？」また「その結果を皆さんがどのように生かせるようにするのか？」と言う事に関して日々腐心しております。これまでは，これからの算数・数学教育を考えるためには「学習指導要領」と「全国学力・学習状況調査」が車の両輪になっていて，その内容や趣旨をよく理解していただくことが大切なのだという話をしてきました。これは今後も変わりませんが，最近になってもう 1 つ車軸が姿を表しました。それが 3 つ目の「指導要録」です。学習指導要領の改訂というものは，本体の改訂，解説の編集を経て，この要録の改訂を迎えて 1 つの節目を迎えます。なぜこの要録の改訂が重要なのかというと「評価の見直し」がなされるからです。現在行われている観点別評価・目標標準評価を今後どうして行くのか？今まさに議論をしているところです。

今日は，この 3 つのキーワードが支えている，より重要なものについて話をします。それは「授業」です。なぜ授業が重要なのか。理

由は簡単です。学習指導要領の趣旨や目標は授業を通して実現することは周知の事実です。全国学力・学習状況調査は指導の改善を大きな目標にしています。要録は子どもたちの学習の状況を記録するわけです。すべてが授業のためにある。ところが私の立場は、最初に述べた3つのことにはかなり関わっていても、授業からはかなり遠いところにあります。だから授業のことが非常に気になります。授業の主役は子どもたちであり、それを支えてくださっているのは先生です。

今日は、授業について5つのキーワードをもとにして話をします。



## 2 授業と個の意識

「授業ができる」とは

まず1点目です。私は仕事柄いろいろなところへ行きます。行く先々でいろいろな研修に参加させていただきますが、今一番タイム

リーなものとして、「学力向上」をテーマとした研修が全国各地で行われています。さまざまな工夫が凝らされています。これらの研修は私の目から見ると大きく2種類に分けられます。子どもの側から考えている研修と教師の側から考えている研修です。子どもの側から考えている研修は、子どもたちにどんな力を身に付けさせるか、どんなことを習得させるのかということを中心に行っている研修です。一方教師の側から考える研修の視点は学力向上に結びつく授業とはどのような授業なのかを先生の側から考えるものです。これはどちらかと言うと指導論になってきます。どちらも学力向上についてですが、視点が違います。もちろんミックスしたものもありますが、どちらかに比重がかかっています。私は後者に関心がありまして、教師の側から考える研修会を主催される方とよく話をします。指導主事、校長先生が多いのですが「成果が上がっていますか?」「先生方は変わりますか?」などと話をすると、大体「このような研修会で重要なことは先生一人ひとりの基本的な意識なのだ。」ということを言われます。

『授業は料理に似ている。』

いろいろ話を伺った中で、一番印象に残っている言葉が『授業は料理に似ている。』です。これが1つ目のキーワードです。例えば、肉じゃがを作るとします。名料理人が調理をするのも私が調理するのも、どちらも同じ肉じゃがで、食べた人はお腹が満たされれば満足すると思いますが、この両者はどちらも「肉じゃが」だと言ってよいのだろうか? このことは授業に極めて似ていますね。

授業を疑う

先生方は45分又は50分の授業を行って教室から出ていく。「授業をした。」と言っていい理由は何か? 先生方がしてきたことが授業と言えるのは何だろうか? つまり自分の授業を疑

う姿勢のついている先生, そういう意識を持っている先生は研修で大きく変わるといえます。注意しなければいけないのは, 自分の授業に自信がないことと自分の授業を疑うことは全然違うということです。自分の授業に自信のない先生はたくさんいますが, これは一種のバリアです。授業を疑える先生は次の授業に一步を踏み出せる可能性があります。先生方は授業をどのように定義していますか? 一番危険なのは「生徒+先生=授業」です。「君達生徒。私先生。だからこれ授業。」というのは成り立たないと思います。先生と生徒がいても授業になっていない教室が多々見受けられます。私は個人的には授業を次のように定義します。「授業は一つのルールです。約束事です。そこに複数の人が参加してくると先生と生徒の役割分担がなされて, 授業が成立します。」授業が終わって職員室に帰ってきて、「今日は〇〇ちゃんの考えがいい勉強になったな。いろいろ教えられたな。」口に出さなくてもそのように思ったことはないですか? これは考えてみると非常に奇妙です。あなたは先生として教えに行っただけなのにどうして教えられちゃうの? 実は先生と生徒の役割分担は極めて相対的なのです。だから授業は約束事で, 一種の言語ゲームなのです。この言語ゲームを教師という肩書きを持った人がどれ位上手にコントロールできるかで授業の質が決まってくる, と私は考えています。

#### 「研修=研究と修養」

元に戻りますが「授業を疑う」という意識をしっかりと身につけることが大事です。先人の名言に「教師というのは持ち前の知識でその日その日を過ごしていける危険な職業です。」というのがあります。非常に恐ろしい言葉です。これは大村はま先生の言葉ですが, 私が言う『授業は料理に似ている。』になります。1点目をまとめたいと思います。教師の主体性を重視したシステムは今後とも重要です。

私は一人ひとりの先生方が自分の授業をよくしていくいわゆる「研修=研究と修養」これを大事にするシステムは今後とも大切にしていくべきだと思います。しかしこうしたシステムを活かして教師が研鑽を積み矜持を高めていけるにはどのようにしたらよいかについてはしっかり考えるべきだと思います。



### 3 授業と個の力量 「型」をもつことについて

2点目ですが, 先程も言いましたが私はいろいろな研修会に参加します。その時主催者側だけでなく, 参加者, 特に若い先生と話をするようにしています。その先生方に「どんな先生になりたいですか?」と聞きます。すると, 多くの先生方は「わかりやすい授業, よい授業ができる先生になりたいです。」といます。私はこの気持ちとはとても大事だと思うんですね。そこで必ず申し上げます。「それは大切なことです。ただし, わかりやすさやよさを求める前提として, 自分の授業に基本的な型があるかどうかは常に確認するようにしましょう。」

#### 『型があるから型破り』

この言葉の裏にあるのが, 2つ目の言葉です。『型がある人間がやると型破り, 型がない人がやったら, それは単に型なしである。』こ

これは歌舞伎の中村勘三郎さんの言葉です。型破りと言われる以上は、型がある。型があるから、それを抜け出すと型破りになる。型がない人はどんな目新しいこと、人のやらないようなことばかりやっても、単に型なしと言われるだけだ。私は、この言葉は教育の世界でも当てはまると思います。ただ、自分の手本となる先生を持つことは大事ですが、教育の世界で先生を持つなら多数の先生を持ったほうがいいと思います。いろいろな先生のおいところをとって、勉強していく。そういう意味で、先生として修業したほうがいいと思います。

#### 授業における最大公約数を考える

私がここでいう「型」というのは、どんな授業にも必ずなくてはならない最大公約数みたいなものです。若い先生がやるにしても、ベテランの先生がやるにしても、これはなくてはいけないということは、授業の中ではいくつかありますよね。例えば、目標と指導の関係の明確化です。私は授業を見せていただくときに、まず指導案の本時の展開の目標と展開のところを見ます。この先生はこの1時間に何をやりたいのか、そのためにどういう方法をとるのか、ここがスッキリつながるとこの授業は見る価値があると思います。ところが本時の目標がすごく多い授業がある。観点別評価を意識しているのだろうけど、4観点全部揃えている。私は単元とか小単元で、バランスの良い4観点の評価ができることは大事だと思いますが、1時間に4つやる必要があるかどうかは疑問だと思います。また、目標が授業の中のどこで実現されているのかよくわからない、ということもあります。今日皆さんのお手元に指導案集があります。授業を見る前に、まず、本時の授業の目標と展開を見て、その接合性を見てください。そのうえで、あなただったらどうするか考えてください。同じ方法をとるのか。よりよい方法を

とるのか。これを考えることが、とても重要ですよ。授業の最大公約数を考える。これを2つ目の課題としたいと思います。

素材の新規性や指導形態などにとられるのではなく、指導の最大公約数を見るようにしましょう。誰も扱ったことがないような教材を持ち込んだり、少人数・習熟度を取り入れることもそれぞれ大切ですけど、これにとられ過ぎると、指導の最大公約数が見えない。どんな授業にも必ずなければならないこと、それをしっかり身に付けた上で、当たり前前のことが当たり前前に指導できるようにしたい。そのためにはどうすればよいか考えることが大切だと思います。



## 4 授業と集団の活性化

### 「授業を共有する」という発想

授業をよりよくするための取り組みは、一人だけでは絶対不可能です。個人頼み、個人任せの授業づくりには限界がある、ということ。このことを私に教えてくれた言葉が3つ目の言葉です。『責任は皆さんにもあるんです。』これは、落語家の古今亭志ん朝の言葉です。昔、落語界には「客が噺家を育てる」という気質があった、といいます。寄席に行くと、噺家を見て、こいつはまだまだ若くて今一つだけれども、このあとうまくなるぞ、と思ったら、鼻負にして、俺が育ててやろう、と

いう客がでてくる。あえて趣味で人を育てよう。それである世界が成り立ってきた。実はこれは教員の世界にも当てはまることなんです。公的な研修は重要です。しかしそこから一步離れてみることも大変重要です。

#### 夜の研修会

私はいろんなところに行って研修会に参加しますが、研修会にも大きく分けて2種類あるんです。1つは教育委員会やセンター主催の公的な研修会ですね。希望研修もあるし、悉皆研修もありますね。こういうものは数が多い。今日みたいなものはそういう研修会とはちょっと違いますよね。任意団体が行っている研修、ととれるかもしれません。もっと極端なのがあります。面白がっている人だけが集まる研修、個人的にやっている研修です。見分け方は簡単です。公的な研修会はだいたいお日様が高いうちにやります。個人的な研修会はだいたい夜7時スタート、とか、そういう研修会です。いろんなところに参加しながら感じることでですけども、今一番活気があって、なるほど面白いな、と思うのは後者のほうなんです。当たり前ですよ。前者は「行けと言われたから、来ちゃった」という人が何人もいますね。後者のほうには参加したくない人は来ないんです。みんな何かを求めて集まってくるからですね。実はこういう研修会を本当はあんまり研修会って言わないです。学習会とかっていう名前です。そこで皆さんにお聞きしたいんですが、立場、制度、仕事を離れて、仲間と授業づくりに取り組む場を持てますか？ 1番目、2番目の課題をクリアするためには、私はこれは極めて重要だと認識しています。1番目、2番目の意識を各個人が持って、こういう場を持てると、本当に強くなれる。ということですね。

#### ゲリラ的な研修会

例をあげます。ある指導主事さんで研修会

を持ってる方がいて、なんと全く条件を付けずに100人の先生を集められた方がいます。算数・数学の授業だけです。それは昼間にやって、出張扱いにはならない状況だったんです。でもふたを開けてみたら、100人の人が集まっていた。私はびっくりして、参加者に聞いたんです。「どうして来たんですか」「授業はどうしたんですか」って。そうしたら多くの先生方が「〇〇先生が新しいことをやるって言うから見に来た」って言うんですね。「何かある」と思わせられる人はすごい人だな、というふうに感じました。多くの活気のある授業づくりの場には、人がいて、授業があり、ゲリラ的に展開しているという3要素がある。ゲリラ的というのは、公的でないという意味です。有志だけでやっている、当然、参加しても偉くならないし、お金も出ない。人がいるというのは、いま言ったようなことです。こういう研修会には必ず核になる人がいます。この人がやるのだったら行ってみよう。多くの場合、指導主事さんや校長先生ですが、現役の方の場合もあります。そしてその話の中心が授業だということです。授業をまず真中に据えることで、一人ひとりの先生が疑問に感じていること、求めていることに応えていこうという研修です。

#### 人の真似をしてみよう

その展開過程には、独創性を求めるだけでなく、「授業を共有しよう」という発想が息づいている。これが非常に大切なことだと思います。私は授業づくりというときに「つくる」という字は必ずひらがなにするようにしていますが、創造の「創」という字を使う人がいます。これは今までにないものを創り出すという意味です。私は授業をつくるときに、今までにないものをつくる必要はないと思います。じゃあどうするかというと、人がやっているものでいいと思ったら、どんどん真似することです。どんなに真似しても、絶対に同



じものにならないです。子どもが違うのですから、必ずその先生の授業になります。それを観た人が、またいいと思ったら、自分のものにしてあげればいいわけです。どんどん人の真似をしましょう。授業を共有するというのは、そういうことです。そういう発想のもとに、いいものを広げていく、こういうことを生かしていければ良いな、と思っています。名人・鉄人・スーパーティーチャー、これらは育てて育つものではなく、自然に出てくるんですね。

#### 仲間は財産である

3点目をまとめましょう。授業づくりについて真摯に語り合える仲間を持つことは、教師として生きていく上での一つの財産である、という発想で捉えて欲しい。職場で、趣味の話や部活の話など同じレベルで、数学教育・算数教育について語る仲間を持てたら、それは相当な財産です。私は役得で、そういう方を沢山持つことができます。それも全国規模で持つことができる。こういうことをあの人に相談してみたい、このことについてあの人意見を聞いてみたい、そういう方がいるのは非常に嬉しいことだと、感謝しております。その財産を活かして、相互に利用して、指導の質を高めるにはどうすればいいか、ということを考えていく必要があるでしょう。



## 5 授業を見直すための視点1 算数的活動・数学的活動の質を問う

ここからは少し焦点を絞っていきます。今のような状況を前提にして、これから算数・数学教育で何を考えてあげればいいのか、ということをお話したいと思います。

たとえ仲間が集まって、闇雲に授業づくりについて考えたって得られるものは少ないでしょう。重要なことは視点を持つということです。同じ視点からものを見れば、価値観を共有できます。その例をまず、算数的活動と数学的活動でお話します。今回、学習指導要領を改訂する際に、小中高の教科目標をどこまで統一できるか、構造的につくれるか、ということで議論をしました。小中高とも、教科の目標の最初の部分に算数的活動を通して、もしくは数学的活動を通して、という文言が書いている。だからこれは、小中高で共通なのです。その上で、2つのことを確認しましょう。

#### 活動をするのは誰？

まず1つ目。算数的活動・数学的活動を通す人、これは指導者です。教科の目標を遂行するのは、先生です。学習指導要領とは指導の目標です。2つ目ですが、こちらが重要です。では、算数的活動・数学的活動をする人は誰ですか？これは先生ではないですよ。算数的活動・数学的活動に取り組むのは子どもたちです。ですから、先生方の役目は、子どもたちが算数的活動・数学的活動に取り組めるような仕組みをつくること、即ち授業を演出することです。初めはそんなに簡単にできないでしょう。だから手取り足取りやります。でも段々徐々に手を離して、最後は自分たちで活動できるようにする、その仕組みづくりをするのが先生方です。これを前提にして、授業を見直すための視点というのを考えていきましょう。

## 『私はこうやらない!』

このことを考える上で、私が非常に印象に残っている言葉は『私ならこうやらない。』というきつい言葉です。私は中学校数学を中心に担当しています。中学校数学の学習指導要領の解説ですが、数学的活動の具体例が9つ出ているんですね。各学年3つずつ出ています。指導主事の先生方とお話する際に、その例を挙げながらこういう数学的活動をつくっていきましょうというふうにお話していくと、大多数の方が納得します。しかし時々気骨のある方がいらっしゃって、「必ずそうやらなきゃいけないんですか」、「私ならこうはやらない」と言われます。これは、かなり勇気がいると思います。私個人に対してならいいけれど、背負っているものがあるのが見えると、なかなか言えない。でも私はこれを言われると、非常に嬉しくなるんです。「私ならこうやらない」と言う人の裏には、「私ならこうやる」があるんですね。別な方法がある。先生方は中学校の学習指導要領の内容に出ている数学的活動を見て、その通りやりますか？ それとも、これまでやってきたことと見比べますか？ 我々の想いは、あれはあくまで例なのだから、全部やる必要すらない。ただし、やるんだしたらこれ以上のものやってください、ということです。まず、これまで先生方が蓄えてきた実践を資産として大切にしましょう。小中学校の先生方は、これまでも現行学習指導要領で算数的活動・数学的活動にかなり取り組んできています。自分の得意技をお持ちのはずです。それは資産として、今後も大切にしましょう。その上で、活動の質を高めていきましょう。

## 活動の質を高めるために

私は算数的活動・数学的活動を見直すには、3つの視点が重要だと、いつも申し上げています。先生方、ご自身の算数的活動・数学的

活動をどれでもいいから1つ思い浮かべてください。その中に今から話すことが入っているか考えてみてください。まず1つ目として、子どもが活動できる前提となる指導はなされていますか？ 分かりやすく言うと、「活動しなさい」「じゃあ考えてみよう」というときに、その考えられる前提をどこで指導していたのかを教える側が明確に把握しているか、ということです。このような前提がないのに生徒が自主的に活動することはできませんよね。2つ目、子どもが活動している過程で、適切な指導がなされていますか？ 活動が始まった瞬間に、先生はフラフラ歩いているだけ、あとは子どもたちがやるんだ、みたいなことはありませんか？ 活動はその過程で深まっていますが、それは指導でいいものになるわけです。3つ目、活動の成果として子どもに何を求めるのかが、事前に明らかにされていますか？ こういうことができるための活動なのだと、これがないと「Aちゃんはこんなことやった。Bちゃんはこんなことやった。Cちゃんはこんなことやった。いろいろできたね、よかったね。」みたいな授業になってしまう。この活動を通じて具体的に何ができるようになってほしいのか、何がわかって欲しいのか、そういうことをはっきりさせているか、ということです。この3つがない活動は、あまり価値がないと思います。そのために授業を共有してみましょう。いいものはどんどん真似しましょうということに集約されるのではないのでしょうか。

## 6 授業を見直すための視点2

## 思考力・判断力・表現力等の育成に向けて

5つ目にいきましょう。今、算数的活動・数学的活動の話をしました。もう一つ例を挙げます。思考力・判断力・表現力等の育成、これは今大会のテーマとも関係があります。今回の学習指導要領の重要なキーワードにもなっています。思考力・判断力・表現力という言葉



葉が表に出てきた経過は、学校教育法の30条2項という項目にこのことが明記されたからです。ここには、小学校、中学校、高等学校すべての学校でその目的を実現するために特に意を用いていただきたいことが書いてある。学力3要素なんていう言われ方もします。ここで確認しておきたいことは、思考力・判断力・表現力その他の能力だけが重要だとは言っていないということです。基礎的・基本的な知識および技能を習得することも、主体的に学習に取り組む態度を養うことも、同じように大事なので、このバランス感覚だけはどうか失わないでいただきたい。まず、この3つはバランスをとって、どれも大事だということを前提にしたうえで、思考力・判断力・表現力等の育成に向けての取り組みということで話をしましょう。

『考えられないなんてことがあるんでしょうか?』

ある授業研での話です。教育関係者のほか、保護者、民間企業の方なんかが入って授業を見るという会でした。「～すること、考えることができる」という目標の授業だったのですが、その後の授業研で民間企業の若い女性の方が、非常に恥ずかしそうに「何か私が勘違いしているんだと思いますけど」と前置きして「そもそも『考えられない』なんていうことがあるんでしょうか? 授業の始めからずっと

寝ていた、とか、頑なに授業に参加することを拒否していたならあるかもしれないけれども、例えば『比例の表ってこういう表なんだな、表の点からこういうグラフが描けるんだな』って考えるのも、考えるですよ。そうしたら、ほとんど考えられない子はいないから、すべての子がこれは非常に簡単に目標を達成しちゃうんじゃないですか」と言われたんですね。あまり教育関係者の会に出る質問ではないですね。先生だったら何と答えますか? 私は「考えたり、説明したりすること自体は、指導の目標にはなりません。もしこれが目標になると、『今日はみんな一生懸命考えたね』とか『今日は頑張って発表したね』といって授業が終わる可能性があります。それでは授業の目標にはならない。大事なことは何をどのように考えたり、説明できるようにするのかです。これを事前に明らかにして、子どもの考えや説明を洗練させていくことが指導の目標になるんです。」と答えました。

今日の授業の指導案にも「説明することが」という表現がいっぱいありました。先生がどういう説明を求めているのか、こういう説明ができれば、今日は概ね満足である、というものが何なのかというのを明らかにしないといけないのではないのでしょうか。「Aちゃんいいこと言ったね。」「Bちゃんもいいことを言った。」で終わってしまっただけでは、授業の目標を実現したことにならないのではないのでしょうか。

#### 記述式問題の奥に隠されたもの

このことを考えるために、ぜひ参考にしていただきたいのが、全国学力・学習状況調査、数学Bの問題です。これは活用に関する問題といわれ、非常に話題になっています。その話題の多くは素材の斬新さとか、記述式が入っていることに対する意見なんです。我々は今ちょっと深いところを見てくれないかなと思っています。実は記述式の問題をつくる



ときには、何を書かせるかということに関して、構造的に物事を考えているんです。中学校数学では、記述式の問題は3つのパターンしかつくっていません。事実や事柄を説明する問題、方法や手順を説明する問題、理由を説明する問題です。

事実や事柄を説明する問題というのは「予想する」ことなどが、これに当てはまります。例えば「3つの連続する自然数の和は3の倍数になる。」これはいくつかの数を試せば、そういう予想がたちますね。命題の形で述べることができる、こういったことを書けるのは、事実や事柄の説明というふうに位置づけています。

方法や手順の説明というのは「何々を用いて、何々する」というパターンです。用いるものと、その用い方を説明させます。例えば「グラフを用いて、 $x$ がいくつときの $y$ の座標を読む」というように方法や手順を説明する問題です。

理由を説明する問題というのはいいですよ。ね。「なぜならば～」というのが一番一般的だと思います。

なぜこのように限定的に物事が運んでいるのかというと、書かせる対象をはっきりすることで、その質を問おうとしているからです。本来、あることを説明するためには、きちんと要件を満たすような解答をして欲しい。そして出来なかった場合には、それを補う指導をして欲しい。そう考えているのですが、ここはあんまり知られていないんですね。書けないということだけは非常によく知られているけど、そのもとにあるものは何なのかということはあまり知られていません。ぜひ、皆さんのお手元にいつている資料に書いてありますから、お読みいただければありがたい。こういったものを元にして、授業で子どもに発表させるときも、今みたいな構造をつくっておく。それを元に子どもたちのちょっと足らない説明、考えを聞きとって、よりよいもの

にする。これが指導なのだ、ということです。

なお、指導の過程における言語活動の位置づけというのが非常に重要なのですが、幸い日本数学教育学会の学会誌「数学教育」の9月号だったかな、そこに書く機会を与えていただきましたので、そちらに私の思いを、算数的活動・数学的活動も含めて、かなり書かせていただきました。言語活動についてはぜひそちらをお読みいただければと思います。

以上、5つの言葉をもとに、新学習指導要領の全面実施までに、それぞれの授業づくりをしていただければと思います。



## 7 最後に

さて、わざと5分間残しました。実はこの後どうしても言いたいことがあったので、急遽5分間残したんです。

なぜ高等学校の先生方は授業を公開されないのか。私はこのことに対して、極めて強い不満があります。小中学校もやれないならしょうがない。小中にやる時間があるなら、高等学校だってできるだろう。先程のご紹介でもありましたが、私は千葉県で7年間高等学校に勤務しておりましたから、元みなさんの同僚です。そういう観点からあえて言わせていただきますが、これは極めておかしな状況です。よくこういう話をする、高等学校の先生から2つ答えが返ってくる。高等学校は小中学

校と違って、大学入試があるんだと、大学入試の問題を解けるようにしなきゃいけないから、先生が言うように物事をじっくり考えさせたり、説明させたりする時間を取っていくと授業が進まない…これは全然根本的におかしいです。じゃ大学入試の問題っていうのはじっくり考える必要がないような問題ばかりなのか。説明する必要がないような問題ばかりなのか。大学の先生はさぞお怒りになると思います。小中学校だって、そんなに毎時間説明や考える時間ばかりやっているわけじゃないですよ。それじゃ先へ進まないですから。重点化をして、必要な部分で必要なだけやろう、そのバランス感覚がとれるのがプロの先生だ、という言い方をしているわけです。適材適所、適切な場面で行うということがとても大切だということですよ。そういうことが、なぜ高等学校でできないか。また、こういう言われ方もよくします。小中学校と違って、高等学校は多様化が進んでいると。高等学校といってもいろんな高等学校がある。だから授業といってもいろいろなんだと。それだから授業研をやってもしょうがないって言いたいんでしょうけど。これについては、ある程度私も認識しています。私は千葉県で2つの高等学校に勤務しましたが、一つは教育困難校、一つは中堅校でした。確かに子どもたちの状況は全然違う。

#### 子どもの学びをよくするためには

ただ、そのことを認めたくて考えていただけなんです、千葉県といわず、「全ての全国の高等学校で共通に行われていることは何だ？」というなぞなぞがあったら、それは「授業」としか答えようがないんじゃないですかね。学校行事も、生徒会活動も、部活動も、それぞれの学校に特色がある。でも、日本全国見渡して、授業をやっていない高等学校というのは聞いたことがない。子どもたちの学びをよくするのは、我々の究極の使命です。

そのために授業をします。子どもの学びをよくするために授業をしているんだったら、授業がよくならなかつたら絶対に子どもの学びはよくなりません。この論理は間違っていないと思います。授業を真ん中に据えないで、先生方が集まって研究協議だけやって子どもがよくなるんだたら、こんな楽なことはないです。多くの方がこういうことをおっしゃらないのは、そういうことを思っていないからではなく、言ってもしょうがないと思っているからだということも知っておいてください。私も今日この話をしようかなと、ある親しい先生に言ったら「永田さんやめときなよ。敵をつくるだけだよ。」と言われました。別に敵をつくっても構わないと思ったから言わせていただきましたけど。こう言わせていただく以上、やはり頑張りたいと思います。特に高等学校の若い先生方。まだまだこれから高等学校は変わっていくと、私は信じておりますので、今日の話を生かして、少しでも高等学校が変わっていくらなと思っております。ということで、時間になりますので、以上で私の話を終わりにします。

